



情報編輯局

一月廿九日 第五百三十三號

週寫眞

長瀬が作った特輯號





中東土橋部隊



中華の建設は既に結ばれた。これから、日本も新らしく、中国も新らしく、いや東亞全部が、新らしく生れかゝるのだ。
古い殻を脱ぎ捨て、眞一文字に永遠の平和建設に進軍する一群の人々を我々は興亞の戦士と名付ける。この群と立ち混り、女ながらも燃えるやうな希望に双時を輝かせ、治安の確保にいそむ女戦士こそは、戦士の中の戦士といへよう。古い封建的生活形態や、因循な傳統から美事に抜け出でて、雄々しく興亞の戦線に躍り出た彼女らの行手には、なほ幾多の障礙が横はるであらうが内地のお嬢さん方も有閑令嬢などといふ有難くない尊稱はよろしく奉還して大いに頑張つて下さい。

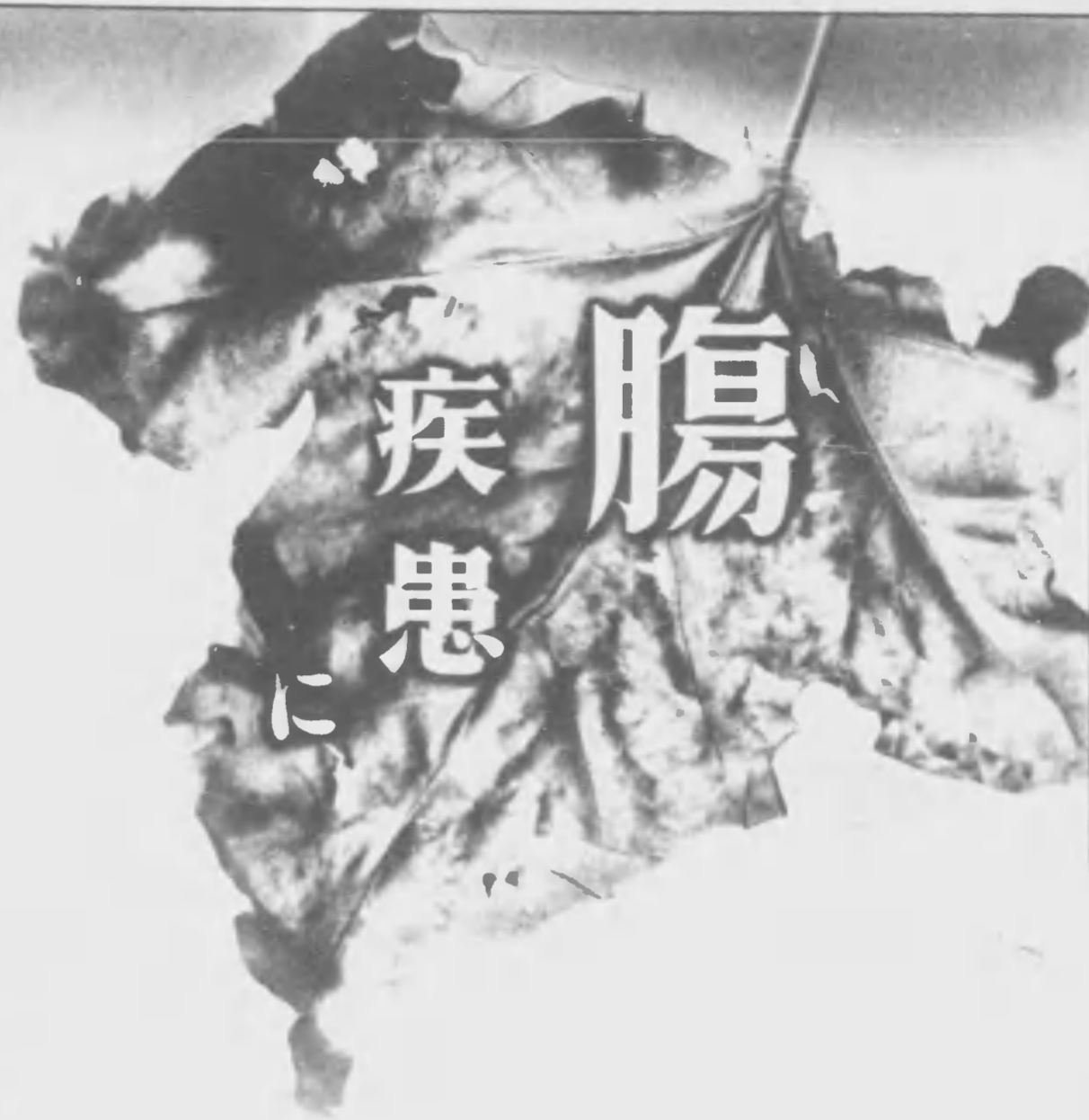
中文 町田部隊



すまれ入に覽御を士警女



武田製薬



ビオフェルミン

整腸・殺菌・消化作用を併有する乳酸菌療法剤！

ビオフェルミンは糖化菌を含有する強力乳酸菌製剤にして、腸内有害細菌を殺滅し、腐敗及び異常醗酵を防ぎ、腸機能を調整するほか、毒素の吸収を阻止し消化を促進するにより、腸疾患に對する安全にして合理的なる薬劑として重用せらる。

〔適應症〕腸カタル、下痢、消化不良、緑便、鼓腸、常習便秘、脚氣、小兒下痢、小兒の栄養障礙、動脈硬化と腎肝疾患、その他傳染性腸疾患（腸チフス、赤痢等）の豫防にも賞用せらる。日味美の製本と製劑 各地藥房にあり。

手販賣元 武田製薬 田長兵衛商店 神戶衛生實驗所 製造元 武田製薬

特輯に寄す

陸軍大臣 東條英機

聖戦第五年を迎へ、御成敗の下皇軍の武威は彌々輝かしく抗日敵軍の困窮は日に加はりつつあることは御同慶に堪へぬ次第である。しかしながら東亞新秩序建設の大業は、一朝一夕に達成し得べきものでなく、一億同胞の勇往邁進が今後益々切望せられる次第である。

由來戦争が長期持久戦化すれば人情の常として、動もすると精神の緊張を缺き、これがために折角今までに獲得した赫赫たる戦果を最後の段階において放棄し、自ら敗戦を招くに至ることは古來幾多の歴史が証明するところである。戦線においては血みどろの戦ひを続けてゐるのに、銃後においては平和を望んでゐるといふやうな前線銃後の連結の緊密ならざる雰囲気があつたのである。しかもこのやうな前線銃後の間隙は通常直接戦禍を體驗しない銃後國民の側から精神の弛緩を來し、これが前線に反映するといふ経路を辿り易いものである。そこでこの精神力の弛緩を防ぐのみならず更にこれを強化して前線と銃後とが一體となりその間隙の隙もないことが勝利のための不可欠の條件でなければならぬ。

今次の支那事變においてこのやうな結果へ導く如き事情がないことは勿論である。しかし何分にも前線と母國とは相離隔してゐる關係上直接出征將兵を送つてゐる家庭以外においては、動もすると張りつめた感情の薄らぐ恐れがないでもない。

第一線將兵活動力の源泉は申すまでもなく銃後の力であり、銃後の後援力である。而してこの銃後の後援力は、第一線將兵の苦勞をわが心とすることによつて自ら湧き上つてくるものである。陣中の生活は絶えず死線を迎へ絶えずこれを克服してゆく氣魄と決意に貫かれてゐる。そこには身も魂もすべてを投げだして、ただ一すぢに邦家のために盡さんとする尊い没我の生活體驗が行はれてゐる。この生活體驗に溢れ湧く前線將兵の赤誠こそ、まさしく銃後にある我々の修養の資であり、實踐の指針であり、偉大なる教訓でなければならぬ。

一面、前線にある將兵は異郷の地にあつて如何に銃後の生活振りに留意してゐるかも考へなければならぬ。例へば前線將兵の中には、内地の事情を誇大に傳へた漫畫等を見て、「國內は物資が缺乏してマツチまでこんなになつたのか」と心配してゐる者があると聞くが、これらは前線が銃後の實情に接し得ないところ、無用の心配をさせてゐる一つの例である。勿論大戦争を遂行してゐる以上國內の日常生活が平和の時と全く同様であることは考へられない。戦時には戦争遂行を容易ならしめるやうに態勢を變へなければならぬ。従つて幾多の困難はあらうが、戦線の將兵が不眠不休あらゆる困苦缺乏に耐へて御奉公してゐることに比較すれば、まことに勿體ないといはざるを得ない位である。

尙戰場の南北を問はず困苦缺乏に堪へ、寡兵よく衆敵を對手として奮闘せられつゝある前線の諸君に對しては銃後の國民はたゞ一すぢに感謝を捧げてゐる。この感謝の念は「兵隊さんの勞苦を思へば」といふ戦時生活の眞剣な態度となり、「兵隊さんに勝つてもらふために」と新らしい日本の建て直しに容易ならざる努力を傾けてゐる。銃後のかゝる忍苦と努力は必ずや前線諸君の背後に力強い後押しとなつて輝かしい勝利を獲得せしめる力となるであらうと信ずる。戦ひに勝つためには前線と銃後は渾然一體たるべきものであり、苟も互ひに離るゝところがあつてはならない。銃後の國民がよく前線諸君の勞苦を忘れざると同時に、前線の諸君もどうか銃後に對する不安は一掃し、十二分に銃後を信頼して、一死報國の誠をつくしていただきたい。前線には何一つ心配をかけないやうにしよ、といふ氣持が銃後のすべての國民に溢れてゐるのである。諸君がこの赤情に應へて國防の第一線を確保することを期待すると共に、益々諸君がこの赤情に應へて國防の第一線を確保することを期待すると共に、益々諸君の武運長久を祈つてやまない。

茲に第一線部隊將兵から情報局に送られた各種の作品を以て特輯を刊行せられるに當り一言所見を述べた次第である。



雪の哨歩
鐵條網に樹氷さく海拔一八〇〇米の山上に紀元二千六百年の元旦を迎ふ
雲に映え雪に輝く初日を仰ぐと、氣自から新たに警戒また覺
北支 上田部隊 前田 實

★敵前渡河
機關をついて支那機は突如爆撃に火蓋を切つた。互砲の激射射撃もまた激烈をきはめる。對岸の敵陣はもう砲火に包まれてしまつた。しかし間歇的に飛んで來る敵の迫撃砲はまだ「正確な照準で渡河點に炸裂してゐる。その間隙を縫つて、各個躍進で渡河する歩兵隊、その一人々々の勇姿が、今でも眼にちらつく」
北支 町民部隊 陸軍上級兵 是永伸(一繪)

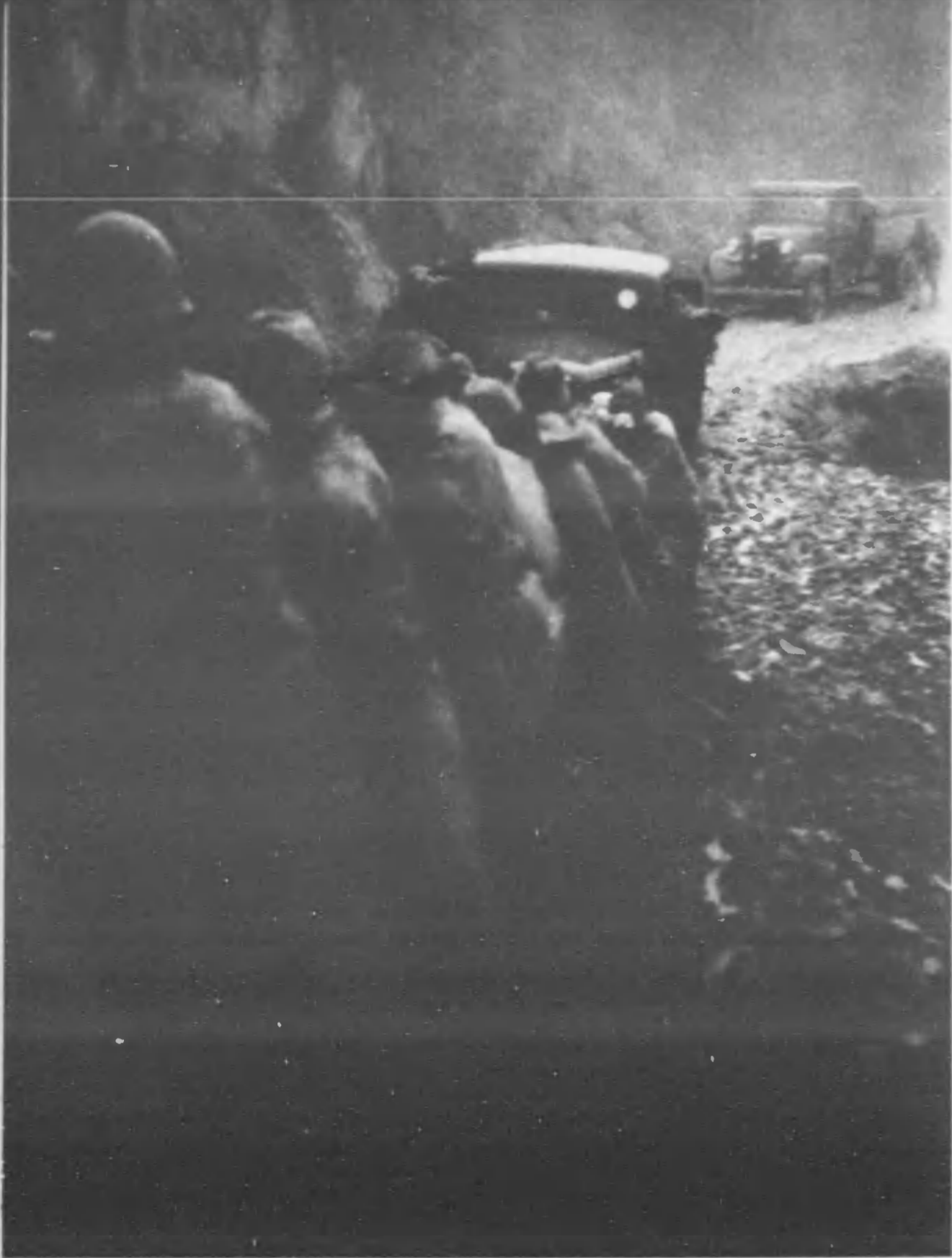


果なき曠野に 血と汗と

連日の雨に、道といふ道は泥海の底に没してしまつた。南昌へ！南昌へ！わが部隊は膝を没する泥濘を物ともせず進撃を続ける
中支 富田部隊

戦線が急進に進んだので患者の輸送には相當苦心した。それでいろいろ創意工夫を凝らして編み出した富田の重傷患者輸送法がこれ
中支 富田部隊

昭和十五年六月、江西省湖口東南方約六料郵陽湖畔蘇現渡に連撃した時、橋梁は殆んど、敵が退却の際焼却してゐた。進撃が急で材料の到着を待つてゐられない。早速應用材料を使つたが、この時の敵前架橋は今でも部隊の想ひ出の一つになつてゐる
中支 米代部隊



山西省の山の中では、十月の雨はもう痛い程冷い。
『一、二、三、ヨイショ』
『一、二、三、ヨイショ』
『もう一息だ、がんばらうぜ』
深身の力に重んぶる足音を容赦なく雨が叩く。この日も食もなく、泥濘と敵のゲリラ戦と闘ひながら、目的地に着いたのは夜中だつた。昭和十五年十月二日山西省壽樂縣〇〇峰標高三〇〇〇米附近
北支 蘇軍部隊 陸軍軍醫少尉 田中慎一

山また山の連続だ。一歩進む毎にまめだらけの足が針でつくやうに痛い。五分間休憩。
「あゝ羊羹か喰ひたいな。俺はせんさいだ」戦友の話をちらりと耳にする。空腹と甘い物に對する飢餓でたまらなくなる。この日だつた。〇〇部隊の友軍機が「地上部隊の連日の御健闘を謝す」の言葉と共に、羊羹、パイ、乾パン、菓子の一杯つまつた慰問袋を届けてくれたのは、兵隊たちは涙にうるんだ眼で何時までも去り行く機影を見詰めてゐた。
北支 田中部隊 前田 貞



戦ひすんで

日の丸

警備につくときまつた時、兵隊たちがひ合せたやうに考へたのは、すぐ警備隊本部に日の丸を立てることだつた。この土地に日の丸を立てるまで、そして立つてから、仰ぐたひに感情は盡きない。

中支 調部部隊 陸軍少尉 石川 眞治

狼 狼

廣東攻略の時、惠州附近で、周章狼狽した支那軍が遺棄した軍需品の山に出遭つた。ひどい暑さで苦しい行軍だつたが、國の土産にも思つて――

南支 東海部隊 陸軍少尉 陸川 吉真

★ 焚 火

パチ／＼と火の粉が噴れた星空に舞ひ上る。厚い防具を通して響ってくる寒気が手足をさすやうに痛い。○は既に出發準備だ。轟々たるエンジンの響きが夜気を揺がしてゐる。誰も話すがない。焚火に熱々と照し出された顔が一樣に黙りこくつて焚火を見つめてゐる。間もなく出發、東の方が少し白んで来たやうに思はれた。

北支 池田部隊 長坂 達(精)



長坂達精

朝の歌

朝の歌
朝の歌
朝の歌

歴史のいさぎ
歴史のいさぎ
歴史のいさぎ

民族の英雄

民族の英雄
民族の英雄
民族の英雄

硝煙の香がきつく鼻をつく。四方は見えない。霞でうなる聲うめく聲がする。私は立ち上つた。顔をなでた。負債一つない。手さぐりで靴をなでると、べつと糸が糸が物音が手にふれた。血に染つた肉地が分隊はさざりた。分隊長は呼ぶが耳が聞かない。分隊長は兵隊にやらせにそれとなく、その内をすれゆく硝煙に私は唖然として立ちつくした。分隊長は虚空をつかんで倒れ、精川上等兵も既に息は絶えてゐた。血

に染んだ帽を、靴を脱いで、水筒や銃具、そのどれもが血に濡れに染んでゐた。それだけではない。筒には橋本一等兵が、また橋本分隊の兵隊が生にまぎつてゐた。

これは激戦に数多の死が、血をのんだ。西野分隊は分隊長以下三名が戦死した。橋本分隊はこれも大きい損害を受けた。重傷を受けて後送される小北買一等兵の目には熱い涙がこぼれてゐた。一瞬にして、ま

た。暑い炎天下の行軍に泥水を飲んでゐると、おいしく飲んではいけないぞ、といはれた。たつたそれだけの言葉だが、そのいたはりの言葉がすくなく胸にこたへる。戦友同士がお互に勵まし合ひ、助け合ひ、涙ぐましい戦線

中で苦ぐるメイファーズ。しさ。この人達の妻や子供はどんなに悲しむだらう。同じ弾丸の下に生活し生死をかけた戦友であつたのに、私は不覺の涙をつひ落した。涙を、涙をかくして笑ふのが男といふなら、結局それはさみしい人間の虚勢でなくて何だらうか。生きてゐる生命を前に、何の虚勢があらう。涙がとどどと私の頬をぬらし



陣中作品について

上田 廣

今は秋風となつて世にない會での戦友と書いてゐる。私達は分隊長の指揮下で、或る山岳の峰に本部の机上に積みあげられた兵隊たちの手紙を見て、手紙の多いのは無敵の陣中である。お國を愛する現はれてゐる、といはれた。文字もよく書けないものもある。文字もよく書けないものもある。文字もよく書けないものもある。

大洪水脈を出ると絶えて久しい。稲刈が渡された。深い米の飯に沸かしたの湯を添へて眞先に三人の遺骨に捧げると、米の飯がたろろと見て見たいよ、といひつゝ、安んじた日のことが思ひ出されて胸にひしひしと迫るのだ。喉へて下さい親一

眞白の衣に包み更へて、胸に抱いた棺の上にたむけた野花が風に揺れる。この日基地に我が家は歸つたのだ。兵隊は何處で何時果てやうとそれは不思議ではない。まして戦地であらう以上。しかし不思議と基地に歸ると我が家に歸つたやうな安んじと生きてゐるよるこなきを感じた

紙風船



紙風船

四方の丘にめぐらすトーチカに何時か秋の蟲がすだき初めた。はる／＼と長く硝煙に冷たくすぎた秋風に紙の心は深く

心は身にこたへて、紙を片手にしてゐる。昨日あんなに戦死した戦友の小さな紙の心、きつ／＼とあいつもまたたけず、あつた内い石のそばに、いつか見られる紙風船。つはものなれ、入知れず、紙の心をこたへて

夕暮

故郷征つ日のあさの熱情が、波のやうに揺れてゐた日の丸や、歎聲と共に何時か雪ふる坂出港が、私の胸に熱くもえ上つてくるのであつた

に遺骨を抱きしめて歩いた。分隊長殿、この湖北の野に何時までも輝かしい祖國を護つて下さいこの建設を育てて下さい。日本が戦争から解放される日はまだ遠くでせう。私達は黙々として建設を進みます。野の果、地の果よりなほ遙かに、熱いしづくがボク／＼と落ちて白い遺骨の衣に沁みだ。かすかにうるむ時に秋の空の深さ。征旅の路はこれからののだ。どこかで轟のすだき音が風に流れてゐた

速報中国兵が、機銃使用も戦陣訓を一部いたゞけませうか



紙風船 少女ころの紅襟標 月影の影を撫でながら 土にまみれた手に秋の

陣中に敵の影もなく 陣中に敵の影もなく

陣中に敵の影もなく

陣中に敵の影もなく

陣中に敵の影もなく

陣中に敵の影もなく

陣中に敵の影もなく

ともしび

外一題

一兵士

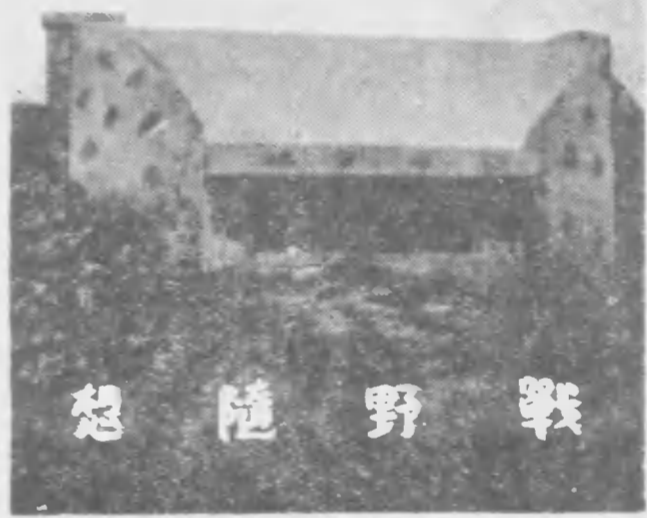
ともしび

支那の農家では燈火として菜種の油を
使用してゐる。石油を用ひるのはよほど
贅澤な方である。われわれが用ひる燈火
も現地物資により菜種油が主なものであ
る。その油の用ひ方は難かしくて下手を
すると油の中におちこんでしまふ。精
つて歩く時には茶碗の隅を歩いて、こゝ
に心を引掛けて安置させる。電燈のない
前線ではこれが唯一の灯りなのである。
こゝで故軍への手紙も書かれ、戦後の整
理も行はれる。懐中電燈を使用するのは
戦闘間における一時期のみで、電池には
限りがあるから我々は大切に用ひて容易に
使はない。

今度の作戦で大山脈を越えて平地に
出ようとする。今まで光といふ光は
星よりほかになかったのに、行進方向の側
方に確かに燈火がみえる。勿論油の灯で
あらう。敵にしては近い。上兵にしては
大膽すぎる。大方土山、山城の類ひであ
らう。凄まじい光であつた。未だに忘れるこ
とができない。
○○で準備についてから、電話室に行

つてみると、實でも燈火がともされてゐ
る。消すのを忘れたのであらうと思つて
尋ねると、マッパ不足で、タバコの大つ
けに用ひたのであらう。光ることもそれ
ないので、私はマッパも煙草もこれに入
れずした。マッパの煙草もさることなが
ら、それほど油が豊富にあるのである。
或る日當番兵が珍らしい食物のない戦
場であつた。マッパの煙草もさることな
がら、早連ラー

早連ラー
ドの白い
塊をみつ
け得意の
腕ふる
つて其夜
にした。
ところが
これを見
たものは
一時間
もすると
猛烈な腹痛を起した。これは食ひたい一
心で、ラードと混ぜつてロケットの塊を
用ひたことが判り、あとで吐つたが笑話
のやうな出来事であつた。このころには、
われわれは食料不足をへて、わげの
判りぬきや南風の葉、果ては草の葉まで
食つてゐたので無理もないことである。
今日は川向ふの森にまたともしびが一
つ響いた。大方敵軍が皇軍の陣手に
抱かれて歸水したのであらう。



野野野

病む者

戦場に用ひた直後に用ひる患者。そ
れは戦場でも病むものも、一通りの苦
しみはない。
身を病床にあつて絶えず身近に銃聲
をきかながら、思ふやうに傾けないのを
嫌うであらう。速かに全快して第一線に
戻りたいと願ふであらう。このやうな時

には道志の品も思
ふやうにやつてこ
ないの。菜食が
十分でなく回復
もみだれる。また
悪役に驚れる人々
の心持はこんなで
あらう。この地方
特有の病気のたゞに
風味し、呻吟する
者も随分と多い。
それでもこれ等の

病氣に立打つて何の苦情もいはず再
び戦場に立つた勇士たちこそ、皇軍の
眞面目である。
勇を懐にして軍務に精勵する人々の
姿ほど尊いものはない。かゝる人に對し
ては心から敬意を表する。身に重傷
を負ひ病風に收容された危険状態の兵
が、同じく入隊中の中隊長の見舞をうけ
て、眼を正し、自分の容體も忘れて「中隊
長殿平病などで驚れてはいけません、必

戦ひの歌

王師いまこの大河をば
渡らんとす
護り給へや 八百萬の神
夜行軍 燈とらへて
照らして見たり いま二十四時
極度の缺乏状態は平常の状態では想像
もできないことがある。部下が隊長を慰
問する品物がわづか野生の小さい梨の實
であり、しかもこれはビタミンを有す
る貴重なものである。そして又隊長から
下されるものがロソク一包み、マッパ一
箱である。内地では戦時下だけに一切の
虚飾が廢されてゐると云ふが果してこの
やうに實用的にまでなつてゐるであらう
か。ロソクやマッパが容易に手に入ら
ぬ戦場で、たとひ一時期でも豊富に使用
できるといふことは何ともいへない喜ば
である。

また行軍の途中などで、ふと休憩時に
當番が振られた身體を忘れて何處からか持
つて来てくれた袋の上に腰かけた時に
は、しみんと腰の有難さをおぼえる。
露降の夢になつてはならぬものも、袋であ
る。用合には水田があり、葉が十分なな
で救はれたやうにうれし。そしてこの
上に長い戦ひでゴロ／＼に破れた皮衣の
まゝ寝る。部下の姿をみると、私は缺
乏とは何であらうか、人間はかくしては
なほかづ生き、強しと戦つて行くのではな
いかと悲壯の中にも鮮々しい血がまじ上
るのを覚える。

南支の秋

森時住謙

御下賜品

今般長も、天皇陛下には、從軍武官
を南支へ御下賜品はされ種々な御旨を
賜はり、あまつ／＼下賜の御旨と御酒と
をみ下し給はる。我々は、お給ふた、
將兵一同御恩の深きに感謝し、御旨の
身御持威のものと一死奉分の誠を捧げ奉る
ことを誓ひ合つたことである。

御下賜品を戴くとは臣民として最も
有難きことであり先登極みなきことであ
り、本人は勿論一門一家の恩恵である。

彼はこの榮光を一身のみ受け下す
事を勿體ないとして、その榮光を一門一
家に預つて下賜の御旨を小使として贈
果へ送つた。小使を送るが故の事故の中
には、この下賜の御旨は、皇軍のしる
よすがとしていつまでも、いつまでも家
寶としてお飾りして、後世に傳へてお
り次の如き句がこゝへあつた。
あなかしこ此の秋に伏せ奉るは
安民樂居



安民樂居

如何にも原始的な收納の方法である。水
中の秋の陽を一杯うけてのたり／＼と和
陽の光を浴びて歩いてゐる光景は實に平
和な風景にみまはしい光景である。
それにしては未だ草花に浴さないとい
ふ。皇軍が可哀相である。今日も亦彼等
は、皇軍に苦しめられ、不安の日を送
つてゐる事であらう。皇軍の使命は大き
い。戦の目的を定めて、東洋の大小
和の光景は未だ遠くである。
我々皇軍將士の任務の重大さをしきり
に感ずる一時である。

黎明南支

日直の彼は起床
前に起きて兵令の
附近を巡察した。
皇の音は今一しき
り一大管絃を奏
してゐる。ほのぼ
のと空は東より明
けそめてゐる。朝の早い士民は、もはや
田畑に行くのだから、肩に籠を擔ひ手に
籠を持つもの、籠を持つものがあつて、或
はは高倉に行くのだから、木炭や、袋入
りの米、野菜等を担いでゐる者があつて、種々
雑多であるが、皆足取りで往來を始め
てゐる。

黎明南支

黎明南支よ！
嗚鳴きつ今大
陸の明けそめぬ



故郷の

便り

軍事郵便は第一線の将兵と後方とを繋ぐ唯一の有形的なたよりである。『来たぞ』といふ喜びや『いっや』と嘆息を上げて集つてくる隊友の顔を見れば、心は、サンタクローのふるふる大砲の音を聞きながら、足元で響いた銃火の音を聞きながら、馬も勇んで前を急ぐ。中支 三野部隊軍中尉 近藤隆藏



便りと兵隊

『郵便』こんな便利で楽しいものはない。父母の安否を知るのも亦自分の近況を知らせる事の出来るのもみんな喜ばしい。遠く懐しい大和を離れ立つた我々軍人が、故郷の便り程待ちこがれるものはない。

○月○日忠告報の志に燃えた我々の駐屯地○○を出発し行先につく。夜を日についた行軍は人費前エースや新聞雑誌を見たり加はだ。自分がこの厳しい行軍序列の一員に加はつてゐると思ふと勝つて来るぞと一節うなりたくなる。月が慰安の光と、月夜の討陣行は一段の味がある。ほんやり浮ぶ露の影、支那獨特の上マンチュウがメイツと曠野に頭を出す。月見れば千々にもこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど。歌人が月夜に終夜筆をもつて首をかしげたのも無理はない我々一兵でも『名月』と出さうと。

『オイ内地でも見てゐるだらうなあ』と某一等兵の眼には夜陰に露の光るを見る。彼も故郷の両親に對して『立派な手柄を立てます』と固い心に一段と拍車つけられてゐるのだ。このやうな我々に書翰が来たといはれる時のうれしさは筆述しがたい。我々新兵グループでは内地からの便りを故郷の衆と稱してゐる若い婦人女學生からの手紙は朝鮮人妻、親の意見はセンプリといふ。朝鮮人妻とは高貴で一才得難く、センプリとは顔をしかめるかららしい。

○書翰や慰問品の仕分けにはうれしき気ばかり。せいてなかに『早くいかない。仕分け係りに當つた兵隊まで、自分の宛名を見つけて出さうものなら、仕分けなぞこつちのけて、取る手もおそしと開封して立ち讀みする。』

南支 山口(甲)部隊

北支 大井川部隊 笠原武雄



一昨日だったか『オイ書翰が来たぞ』と戦友インシコロ一等兵、三浦三崎産で人並以上に厚いからいつたニックネームだ。夕食もそこそこ事務室へ飛ぶ。事務室といつても名ばかり、十何年も使用したと思はれる古い机が、七や八のみの。人口の扉を叩いて、『郵便』は水溜参りました。我々大きな聲だ。十五度の敬禮をして頭を上げる。『朝鮮人のK曹長の前はもう十二、三名列をなしてゐる。彼等も飯を吞んで来たのだから、あんなにぞくぞくもない』と一喝、早く差出入の名を知り度く誰かが背

のびしたのだから。『我がで自分の番だ』どうか朝鮮人妻であれかし』と頼つた甲斐があつたのか桃色の封筒だ。御奇特な人ほどなだであらうと裏を見る。ロソクノ光に浮き上がる女文字、幼友達のA子さんだ。封をきつて喉入る様に目をそぐ、誰からか』と鬼より恐い。『ナ』女學生、年は何んは、メンコイ

氏か待つてゐる。『オイ人妻か?』『へい、朝鮮人妻も極上だ。封筒でも拜め』ノロケヤが一息のく〜と空腹でたまらぬ財布から一命三十銭だから。然し三十銭の朝鮮は安いもんだ。中にはセンプリの『週報』如きものもある。兎に角便りは一日の労苦を忘れ明日の任務をつくるには、無くてはならぬエネルギー

のか。彼氏は北海道産である、メンコイとは可愛いといふ事だ。『ハイ年は十八、とても美しいであります』兎角初年兵は正直だ。此の野郎マア、若い中だ、せい〜と、俺も初年兵の時はずぶん来たもんだがなあ。と若かりし頃を思い出したらしい。『異状ありません』と班内へ逃げる。インシコロ

た。手紙の来ない者皆可愛想な事はない。『オイ、すまんが見たら見せて呉れんか』と人の手紙で氣持を紛らす彼の青年連中もある。物價騰貴の折柄とはいへ、四銭でこんなに元氣になるかと思ふと滋養強壯剤などは高すぎ。明日は来る様だと祈りつゝ、兵士は内地的ポストは

北支 見城部隊 永瀬昌利



兵隊の便り

1 部隊にはあらゆる人材が集つてゐる。けふはわが部隊創立記念日だ。俄か仕込みどころか専門家の演説(一人見聞)に兵隊は堪えず。

2 前線の駐屯地で郷土からの慰問演説隊を迎へた喜びは故郷に歸つたやうな気がする。踊り、仲話にわしは國の香りが鼻をつつ。高知駐屯隊

3 われわれの感情を和けるものは慰問演説である。武昌に派遣された陸軍各部隊の慰問隊

中支 尾崎盛部隊





チツクス 『俗風支南』
— 根美 隊部東伊 支南



隊保井櫻 隊部東伊 支中 櫻の岸江
らかこは春—櫻く咲に岸江子揚の界租本日口淡

のら分自
ムバルア
らか



武 澤中 隊部桐片 支北 寺おの古巖
寺覺光の聖白の臨瀛朝るあに中山のロキ五十四約北東の頭包



三富本橋 長官軍隊 隊部松藤 支北 塔古るな聖
鏡阿晋地天別しび結を夢に築魔が山鋸置はてつか
つ待を来軍皇てしと然駭に空塞のこは塔瀛朝の



チツクス てに路北民漢 『場市人那支』
夫 英 漆 隊部藤近 支南



三藤田池 隊部部岡 支中 景風村農の那支
た稚幼もにり餘は耕農の民済土しかし土沃たしと々廣
ふ思とらため込り送を民農秀優の地内本日も時何



部本隊部(文)田永 支北 り賣水の支北
少に常非は水い良く悪が水ろことるたいは那支
現出の資命珍ふいとり賣水の質良でこそいな



夫信林小 樹中軍陸 隊部隊大 支北 撫宣づま
もき若もい老たへ傳を意真の軍皇てめ集を民良速早
るみてけ傾を耳に壁の序秩新



るみてえ汗く寄入一 月の印佛 月るゝかに子種
— 金 橋 大 隊部江蘭小 印佛



名芳川陸 隊部海東 支南 期明の東廣
國中! 吾東廣そこ一タスボの國救蔭倒たい意が等彼



一渡林小 隊部武百 支南 傳手の刈稻
務軍るみでん勤に業でん喜はちた民農で護保の軍皇



チツクス 秋の南江 『獲 牧』
鄭二治澤大 兵等上軍陸 隊部松重 支中



隊部 中田 支中 閑小の地戦
ンサーンばれ見を姿の隊兵はちた供子の那支
るけつり賣をコマで来てつ寄とンサーン



共 同 信 託

大東 本店
 京市 支店
 阪市 支店
 東市 支店
 區 支店
 今内 支店
 橋幸 支店
 町神 支店

内閣印刷局印刷發行

判信紙通一A4 紙規正國はさき大の書本